



言葉で伝え合おう

令和5年12月1日
静岡市立南中学校
学校便り 12月号

テーマ「何か手伝うことはありますか？」

校長 長尾 剛 史

「先生、毎年のことだけどね、町内で防災訓練やるとさ、中学生が来るでしょ。でも、公園のすみっこにいて見てるだけなんだよ。『何しに来たの？』って話。それで訓練が終わると、『ハンコください』って来るんだよ。学校で『証明のハンコをもらってこい』って言うてるでしょ。学校でさ、訓練の受け方を指導してくれないかなあ？」 18年前、私が市の中心地のJ中学校に勤めていた頃、親しい自治体の会長さんに言われた言葉です。12月第一日曜日に行われる「県一斉地域防災訓練」が近づくと、この言葉を思い出します。

この当時、神戸市を中心とした「阪神淡路大震災」が発生した後で、都市型災害に対する関心が高まっていて、防災訓練が重要視され始めた頃です。しかしJ中学区の実情は、市の繁華街が学区ということもあって、どの町内も訓練が実施できる状況ではありませんでした。中には防災訓練ができず、「市の職員に何とかしてほしい」と訴える自治体すらありました。そんなことから、防災訓練ができない自治体の生徒は、仕方なく他の自治体の訓練に参加していました。そして私は、親しいA会長さん宅に向かい、頭を下げて中学生を訓練に参加させてくれるようお願いしたわけです。Aさんの言葉は耳が痛いものでしたが、「一理ある」と職員会議でこの事を伝えたのです。すると、しばらく押し黙っていた先生方の口から、「そこまで学校がやらなきゃいけないのか？」とか、「生徒が参加しやすい訓練を町内会が工夫すればいい」などの言葉が出てきたのです。（それを私に言われても…）という思いと同時に、何か別の感情が私の中で湧きおこってきてしまい、つい私も「今、そんなこと言っている場合じゃないでしょ！」と、強い口調で言い返してしまいました。この頃、J中では「かけがえのない命を守ること」をテーマに、防災プロジェクトを立ち上げることが決まっていました。学区の人たちが困っている共通の課題に対して、「他人任せ」や「人のせい」にする意識が、最も大きな障害になると私は考えていました。後にこのプロジェクトは「プロジェクトJ（PJ）」と呼ばれ、防災教育の手本となっていきます。ちなみに、各校で現在取り組まれている防災学習のほとんどが「PJ」によって始まった指導です。例えば、「個人用災害備蓄品の用意」「防災学区探訪」「災害図上訓練DIG」「避難所運営訓練HUG」。トリアージ訓練を一早く取り入れたのもJ中でした。そして知識や技能を身に付けた生徒たちは、自治体の防災訓練があると勇んで参加しに行ったのです。



「何か手伝うことはありますか？ 私たちにやらせてください！」と。学習したこともあります。それ以上に生徒たちは「PJ」から、皆の命を大事にしていくことが一番の使命とする心構えを吸収したのだと思います。また、連合自治体も負けてはいませんでした。現在、訓練時に「全員無事」を報せる「黄色い旗」の目印があります。これを考案したのが、このJ中学区の自治体さんたちなのです。

さて南中では、ここ3年間、さまざまな防災学習のほか、東日本大震災に被災された方の「お話を聴く会」により「かけがえのない命を守ること」に取り組んでいます。と同時に、探究「我ら南中学区応援団」を通して、学区の魅力や役割を市内外に発信しています。この両輪の取り組みにより、明らかに南中生の学区に対する「ふるさと感覚」は上がり、自分が学区の一員であるとする自覚が向上しています。自治体の訓練に参加することは勿論ですが、最も大事なことは、「何か手伝うことはありますか？」の言葉と気持ちだと思います。自治体のA会長さんは、それを言いたかったのだと私は思っています。この学校だよりが各地区に届く頃には、防災訓練は終わっていることと思います。今年の南中生はどうだったでしょうか？ 今後とも南中生のご指導宜しく願います。

発行 隔週 令和5年(2023年)10月25日(水曜日) 中 10頁(部) (20)

東日本大震災経験の元中学校長

被災生徒の「心の復

静岡県中では、防災学習の一環として、東日本大震災の時に宮城県仙台市で避難生活を送った経験を持つ元校長、長尾剛史氏(右)が、静岡県中の各校に防災学習の重要性を説いた。静岡南中の元校長長尾剛史氏(右)が、避難生活の経験から、生徒に何を教えるべきかを語り、全県に広がった。取材：長尾剛史氏

静岡南中で防災学習講演会

「逆境に立ち上がる強さある」

LOCAL NEWS 中部